

III 外部評価結果

(*本文は英語による報告書の訳文)

1. はじめに

この報告書は、国際教養大学(AIU) への非常に短時間の訪問に基づき作成したものであり、大学の新しさと実験的な取り組みを鑑みると、全ての資料に目を通した後でも、委員会(the team)が AIU の取り組みもうとしていることの真髄を把握するのに、しばらく時間を要した。しかし、ほどなく委員会は、AIU の指導者ならびに先見性と勇気をもってこの新たな取り組みを支援することにした秋田県の大胆な構想に非常に感銘を受けるに至った。

委員会は、大学の日本語名である「国際教養」大学が、その運営目的をよく反映していると感じた。大学の構想は非常に明確であり、事務局、教員の全員によく理解されている。目標は、実践的な英語力と基礎的な教養を身につけた包括的な能力を備えた卒業生を輩出することである。AIU の卒業生は、効果的で問題意識を持った考え方をする人材(critical-thinker)となり、何名かは次世代のリーダーとなる可能性が高いであろう。

AIU の強さはすでに明確である。英語教育をはじめ教育全般は非常に優れた質の高いもので、そのような教育事業のユニークさを「宣伝する」経営手腕により、大学に関する様々なランキングにおいて AIU の評価が急速に高まったことが判る。そのため、AIU は最後の選択肢ではなく、先見の明を持った若者が自覚をもって選択する大学となっているようである。特に、英語教育の分野では、献身的な教員が非常に効果的な教授法を用いて、学生が熱心に授業に参加するよう一生懸命取り組んでいる。こうしたことから、委員会は、AIU が英語教育に関する高い目標をやがて達成するものと確信した。同様に、委員会が授業を見学したその他の教員(哲学、文化人類学および中国語)も、効果的な指導と学生達との良好な関係を築いていることを示していた。

評価委員会における最後の議案、質疑応答に基づき、以下、この報告書を委員会が意見を求められた 6つの項目に分けることにする。

2. 評価結果

(1) 大学の理念と組織

委員会は、大学の理念が、今日の時代背景、すなわちグローバル化の現実とそれに対処できる人材を育成するという社会の要請をうまく捉えていることに納得した。委員会はまた、AIUの教職員がこのことをよく理解していると感じると共に、教職員が「グローバル化」の意味と挑戦、それに大学の教育プログラムや自分たちの業務が自ら定義するニーズにどれだけ対応しているか、ということについて定期的に話し合う機会をもつことを期待する。このような大学を受験しようとする日本の学生は、自主的に選択するやる気の高い学生である。委員会は、今回「一般の人々(the public)」に会う機会がなく、彼らがどのように理解しているか判らない。しかし、各種メディアでAIUは頻繁にとりあげられており、中嶋学長が学者として、教育者として、また経営者として国内外でよく知られていることは明らかである。中嶋学長は精力的に出張してAIUのPRを行っており、その結果はAIUに協力する意欲を表明している海外の提携大学の数に表れている。委員会は、学長を励まし、教職員がビジョンを「宣伝」し続けることを促したい。今回は、管理職以外の職員に会っていないため一般職員の理解度については立証できないが、資料の範囲では献身的で一生懸命取り組んでいると思われる。

AIUの取り組みは実験的であり、教職員は国際色豊かであることから、地域とオープンかつ十分なコミュニケーションを維持し、定期的にフィードバックを得ることが重要である。この実践には時間を要するが、問題が生じた際、遑って初めからやり直すより、時間をかけても今すぐ適切に取り組む方がよい。ここでは「柔軟性」が鍵になる。求められることは、事態がどのように推移しているか進んで評価し、変化を受け入れることであり、それを運営の失敗として捉えないことである。県当局も、このことについて性急になり過ぎないように留意する必要がある。今回の委員会開催前に行われた国際会議などは、外部からのフィードバックを得るにはよい手段である。

【検討課題1】

世界を舞台に活躍できる日本人学生を育成するためには、学生がより高度な教養と外国語の能力を身につけることに加え、日本の歴史や文化、伝統について深く理解し、国内政治に対しても関心を高めることが重要である。キャンパスの規模や立

地条件故に、こうした課題から学生が疎遠になることのないように対策をとる必要がある。委員会は、AIUの学生が、地域での活動や県内の他大学との共同事業に参加する機会があることを確認したが、単位互換制度の活用などにより国内の他大学との学術交流の促進についてさらに検討する必要性を感じた。

大学運営のために必要な規程、制度、手続きおよび様々な事業計画の遂行が大学の理念に沿って確立されていることを委員会は再確認した。しかし、これらすべてが必ずしも全教職員によって理解され「自分達のもの」とされていない点がやや気になった。AIUの哲学および目標を学生や県民全体に広めることができる唯一の方法は、教職員の理解である。

入試の段階で外国語能力を重視することは、大学の理念に照らし合わせても不可欠なことであるが、入学後、様々な段階で課せられる語学条件を満たすことができない学生を大学として継続的に支援することが重要である。委員会は、現在の制度では、そのような学生がAIUの教育プログラムをどう修得していくのかが不明瞭であることが気になった。資料に示されていた数値をみると、いくつかの厳格な進級基準については再検討する余地があるように思われた。

大学経営会議が、全ての大学関係者にとって、重要事項を決定し中期計画の進捗状況を確認する機会である以上、委員会は、この会議を毎月開催した方がよいと考える。会議の議案は、決議が必要なものと中期計画に関して報告および討議をするものの二つに大別されるだろう。

委員会としては、異文化教育センターの活動について、もっと多くの情報提供を要望したい。

(2) 言語教育

委員会は、日本人学生の英語力を評価するに十分なだけ彼らと話す機会はなかったが、視察したEAPの授業から判断すると、教員は、少人数授業の利点を最大限に活かし、非常に効果的で適切な指導を行っているように思われた。このことは、150人中142人の学生が秋学期終了時にEAPを修了し、また、学生のTOEFLのスコアが、入学時の平均448.5点から春学期最初の7.5週授業の終了時には495.8点になったこと、さらに2005年の6月には522.5点まで達したことにより証明される。委員会は、学生が大学のねらいを十分理解できるように行われている修学に関するアドバイスやオフィス・アワー制度を高く評価する。

この成果をさらに伸ばすためには、学生が可能な限り英語（あるいはその他狙いと
する外国語）で生活をする環境を創り出し、気兼ねなく弱点を克服できるようにす
ることが不可欠である。皆が自分自身を言語の教師のつもりで考えるべきである。

（これについては、教える状況だけでなく、ビデオを利用し様々な異なるアクセ
ントの英語を学ぶことも面白いのではないか。）委員会は、見学した授業の中で特に中
国語を教えていた教員に感銘した。彼の中国語の発音は素晴らしく、しかもそれを
英語で教えていた。地元の学生が AIU のキャンパスを訪れ、日本人でも「英語で生
活する」ことができるということを見てもらうような機会を秋田県が提供すれば、
県はその支援に対して「見返り」を受けることができるだろう。

【検討課題 2】

地元の障害を持つ学生をキャンパスに招き、学内で何かしらの体験をすることで、
自分たちでも大学で学べるのだという自信をもってもらうような企画を検討してみ
てはどうか。加えて、英語の補習授業に地元の学生を参加させるなどの試みは、地
域とのつながりを強化するのに役立つのではないだろうか。それはまた、AIU の学
生に自分の語学力について自信を与えることにもなるだろう。

秋田県のためにしっかりと根付いている大学として、AIU は県内の中学校、高等
学校における英語教育向上のため、さらに支援することができると感じた。AIU が
受験生に求める英語力と県内高校における英語教育のレベルには大きな隔たりがあ
り、このことが、県内学生の多くが AIU への入学における最初のハードルとして苦
しんでいるように見受けられる。（この理由により、AIU が県内高校からの入学者
に定数を設けたと推測する。この定数を定期的に見直すことを提案する。）

直近の学生の英語能力に関する全国調査では、秋田県の中・高生の英語力はほぼ
全国平均だが、2004－2005 年期では伸び悩んでいる。この点から、AIU の地域貢献
活動の焦点を、特別講座などの開催から県内英語教員の英語力の向上のための事業
へと、より実質的で重点的な支援に移していくことを提案する。

国内の受験生が文部科学省の指導要領に基づいた教育プログラムにより英語教育
を受けていることもあつてか、AIU 受験者の選考基準が極端に「帰国生」を優遇し
ているように見受けられる。合格した学生を、合格から入学までの期間、英語圏の
海外の学校で学ばせるような企画を検討してみてもどうだろうか。

委員会は、グレゴリー・クラーク教授の提唱する学習技術に基づいた ESL プログ
ラムのためのフォーカスト・リスニング(あるいはディープ・リスニング)に最も関心
を持った。これは、AIU 独自のものであり、数々の魅力的な可能性を含んでいるた
め、次回のこの会議で、その進捗状況が報告されることに期待する。

(3) 教養教育

AIUには、しっかりした核となるカリキュラムがあるが、全ての核となる授業科目を英語で教えられる教員を長期間にわたり確保することは容易ではないだろう。選択科目の提供は、教えられる教員がいるかどうかと、その教授力によってほぼ決まる。AIUが全ての点において引き続き「グローバル」という視点に重点を置くことは非常に重要である。このことは、人間のものの見方は様々であり、それを理解し、適応していく術を見出していくのがグローバル化の一面であるということについて、日本人および外国人学生が理解を深めていくことにつながる。外国人学生は日本について学ぼうとして来日するが、日本人学生が日本について英語で説明できるようになる訓練を受けることも同等に重要である。日本人学生は、日本に関する科目を履修することで、外国人が日本について抱く疑問や誤解を理解し、英語でこれらのことを説明するための語彙を増やすことができる。委員会が視察した授業は、その点において非常に効果的に行われていた。教員が一方的に講義をするのではなく、少人数で、議論へ参加しない学生も中にはいたが、内容は興味深いものであり、クラス討議に役立つものであった。

意見交換と共通の目的について議論するために、基盤教育の教員が定期的に会合をもっていることは特筆すべき取り組みである。カリキュラムおよび教授システムの実施が、継続討議の議題であったことは明白である。これは、少人数教育による効果的な教育の質の保障と教養基盤の多様化のために必要なことである。委員会は、そのような努力が将来成果をあげるであろうと見込んでいる。

【検討課題3】

学生を在学3年目に海外の提携大学に留学させる準備のため、慎重に提供科目を選択しても、英語による教養科目の授業についていけない学生がでてくることは確実である。しかし、哲学の授業を例にあげると、出席した学生全員を授業に参加させようという教員の努力と、クラス討議の内容を理解し明確にすることができた二人の外国人学生のおかげで、他の学生も議論の要点をつかみ、討議についていくことができていた。従って、授業の中での優秀な外国人学生の存在は、国際的な雰囲気をつくるだけでなく、日本人学生を刺激する役割を果たすのである。

(4) 学生支援

授業がすべて英語で行われていることや、1年目は全員が寮生活を義務づけられていることなどから、学生が資格を有するスタッフによる適切なカウンセリングを受けられることが不可欠である。視察を通じて、個人に対するカウンセリングや精神衛生に関するワークショップあるいはプログラムの実施により、AIUがこれらの問題に取り組む努力をしていることがよく理解された。また特筆すべきは、奨学金や経済的支援制度、キャリアデザイン・プログラム、インターンシップ、ハラスメント防止策など、学生を支援する努力が個々の職員によってなされていることである。

【検討課題4】

学生寮、カフェテリア、学生のアパート、図書館の改善などを含め、学生生活に直接影響を及ぼす課題に関して、学生の意見を取り入れ検討するためのしっかりとした仕組みが必要である。特に、「寮やカフェテリアを運営する団体」との交渉は喫緊の課題である。学生の意見を料金やサービスに的確に反映させるための努力を、市場原理に基づいて行っていかなければならない。(注：この件については、従前、この地にあった大学が抱えていた負債が関連しており、AIUの学生および教職員が享受すべき適切なサービスの提供を阻害している。)

AIUの運営が確立するにつれて、外国人学生と地域の人々の交流の機会が増えていくことを希望する。

全ての学生に、卒業時「満足度50%以上」(「満足度75%以上」の学生が半数以上)と評価されるためには、さらに努力をしていく必要がある。それ以上に、大学の理念および目標を実現するためには、学生の士気全般に深刻な影響を与えうる「不満足」の評価が完全になくなるようにすることが重要な課題である。アンケート調査の結果がどのように分析され取り扱われているのか全て理解しているわけではないが、今の段階で言えることは、関係者全員が、この取り組みは実験であり、建設的な意見は真剣に検討されなければならないということを確認することが重要である。

最寄りの駅までのバスの運行が学生の行動範囲を広げる一助になったことは明らかだが、学生が孤立感を持たないように、さらなる努力が必要である。

学生がどのように留学に備えているのかについて、今回、生の声を聞くことができなかった。この点は今後の課題であるが、この過程については慎重に検討されるべきである。

(5) 大学の施設・設備と環境

キャンパスは素晴らしい環境にあり、くつろげる雰囲気がある。特に、道路を挟んで向かいにあるスポーツ施設は、使用できない場合があるという問題があるものの、素晴らしい施設である。AIU の資産は三者（大学敷地は秋田市、寮やカフェテリアなどは雄和育英会、他の施設や建物は秋田県が所有）に分割されているため、各方面の関係者と意見を交換する機会は非常に重要である。学生や職員の意見を適切に反映するためには、このことの重要性が大学規模の拡大につれて増していくであろう。「顧客重視」の精神にもとづき、大学運営や施設拡充への取り組みが実施されていくことを期待する。

【検討課題 5】

AIU の各教室には高性能の設備が備えられているが、特に留学を控えた日本人学生を海外の提携大学と結びつけるために「バーチャル教室」の開設について検討してみてもどうか。加えて、留学する AIU の学生数が増えるのに伴い、海外の大学と共同で提供する授業やセミナーの開催要望が急速に高まることも考えられる。しかし、そのような共同事業や現在実施している取り組みの円滑な運営を確実にするための IT 基盤整備の予算は限られている。AIU は、遠隔地教育や e ラーニングの実施に必要な最新技術の整備について真剣に検討すべきであり、これはまた、単に外国語の習得や補習授業のためにだけでなく、教養教育にとって最も効果的な手段となり得る。高等教育における IT 化が文部科学省の政策の重点分野であるにもかかわらず、その浸透のスピードは他の国々との比較では遅れているため、AIU がこれを進めることで、日本国内での競争において抜き出た位置に立てるだろう。

質疑応答で述べたとおり、文部科学省は特色 GP、現代 GP、国際 GP などにおいて競争的資金の供与を積極的に行っている。多くの国公立の大学は、そのような資金を獲得しており、近い将来、AIU の教員もそうした最新技術を利用するようになることが予想される。そのような先端技術を備えた大学では、学内のインフラ整備や維持費用は学内予算の中で重点的に確保され、教材の開発には競争的資金が使われる。大学間の教育水準の差は、このような分野における努力によって広がることが予想される。

図書館は、明らかにかなりの拡充が必要なもう一つの箇所である（日本研究に関する英文の蔵書があることや県民にも利用が開放されていること、24 時間開館ということなどは好ましいことであるが）。特に、教育・研究の両方の目的のため、定期刊行物の収集やオンラインデータの蓄積が必要である。

コーヒーラウンジが備えられたより魅力のある学生センターがあれば、大学の落ち着いた雰囲気をさらに高められると感じた。

(6) 管理・運営体制

学長を先頭に、全員が大学のビジョンを「宣伝する」ため多大な努力をしてきたことは明らかである。対象を海外まで広げるなど部分的に強化しながら、引き続きそうした努力を行う必要がある。全教職員は熱意と使命感をもって任務を遂行している。重要なことは、これが短期で終わらないことである。新しい組織は、事業の改善と変革を続けることによって初めてしっかりとした組織へと変わることができる。

大学の創設期は最も多忙な時期であり、ある面において、試行錯誤は不可避である。教員は、新しい役割を理解し、変化し続けている環境に適応することに追われているという認識をもつ必要があり、職員も育成されているところである。この大学の取り組みが長期にわたって成功するための鍵は、献身的で意欲の高い教育・研究者のチームを保持していくことだろう。もし、教員の回転率が高ければ、教員確保のための仕組みを考えるという新たな課題を生むことになる。したがって、教員のチーム作りに労力を注ぐことが重要となる。

【検討課題 6】

AIUの自己点検・評価報告書によると、全ての職員は大学開設初年度の目標の達成について、Cまたはそれ以上と評価している。これは高い評価に値する。学生による教員評価については、ほとんどの教員は肯定的に評価されていたが、4人の教員がDまたはそれ以下と評価されていた。全教員は、新しい役割を理解し、変化し続けている環境に適応することに追われているのであり、その適応に時間を要するということが考慮されるべきである。学生も、同じくこの点を理解すべきである。教職員や学生はそれぞれが「開拓者」であり、その意見が尊重されることによって、全員の目標そして大学の目標が達成されるのである。その意味では、学生から低い評価を受けた教員には、モニタリングと指導法を改善するための支援が必要だろう。すなわち、教職員の能力開発のためのワークショップや他大学および団体との学術交流、学生や一般の大学利用者との意見交換など通して、公平かつ明瞭な運営体制の推進が求められるのである。

近い将来、時間と資源の両方で大きな投資が必要となる分野は、研究機関として

の AIU の整備強化である。個々の教員は、自分の研究活動のために給付されている研究費の額に満足しているようである。一方で、最高レベルの教育を学生に提供するため、新規の授業を開設することに多大な労力が使われている。これは重要な優先事項であるが、長期的には、トップレベルの研究機関としての評価を得ることが AIU にとって重要である。その目標達成のための戦略は、まだ全体像が明らかになっていない。直ちに実践できる手段の一つは、教員が現実的に勇気付けられる科学研究費を獲得する努力をすることであり、これはトップレベルの研究機関として認知されるための前提条件ともなっている。

これに関連して、教員の雇用における 3 年の任期付き契約制度の問題がある。この制度は、大学創設時には高い質の教育を確保する上で、大学運営に最大の柔軟性を与えるという利点がある。多くの日本の大学は、非生産的な教員の解雇に苦慮している。しかし、大学が成長するにしたいが、この制度は見直しが必要となるだろう。一流の教員は、長期の雇用が確約されていないことにやがて不満を感じはじめるだろう。そのため、トップクラスの教員が AIU に来て長く留まるような制度改革をする必要がやがて生じるであろう。

3. 総括

現段階では、AIUは高く評価される。この大学は限られた資源と環境面での課題を有しながらも、特筆すべき判断力と機動力でこれらのことを利用している。AIUは、明確な目的と自己意識を持っており、非常に高く設定された目標の多くを達成するための用意ができていように見受けられる。しかしながら、それは、秋田県からの政治的・財政的な支援をどれだけ獲得できるかにかかっている。この大学の新規の取り組みの長期的な成功は、卒業生の進路によって決定されるであろうが、現実には、現在の大学運営が順調に行われていることを踏まえ、委員会はAIUが素晴らしいスタートをきったことを高く評価したい。

最後に、外部評価の実施に対するAIUの積極的な姿勢を評価したい。市場があらゆるサービスの質を評価する時代において、この評価は非常に重要であり、AIUはこの意味で歓迎すべき先駆者である。

トーマス・ゴールド

小玉 英子

南雲 光男

小野 博

マイケル・ペン

マーク・ウィリアムズ

2005(平成17)年12月